

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	雑誌「龍南」に就て：文苑
Author(s)	田代，三千稔
Citation	龍南， 1 7 7： 1 3 3 - 1 3 7
Issue date	1921-03-10
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7774
Right	

雜誌「龍南」に就て

田代三千稔

終りまでお讀み下されば解る事です、これは決して戯曲でもなければ、又、所謂對話でもありません唯、雜誌「龍南」に就いての私の感想を、便宜上對話の形式にしたまでです。

(ある讀者)——雜誌「龍南」は此の龍南生活の唯一の表現たるべき重大なる任務を帯びてゐるにもかゝはらず、どうも固苦しくて面白くないね。

(ある編輯者)——それは然うだよ。何しろ、學校の機關雜誌だから、面白俱樂部や女學世界など讀むやうに面白くはないよ。

(ある讀者)——だけど君、いくら學校の機關雜誌とは云へ、も少しどうにかならないものかね
(ある編輯者)——勿論、どうにかなるよ。併し、

一國の文化の程度を昇上せしむるには、先づ

その國の民衆が自覺めなければならぬ様に「龍南」を君の所謂「固苦しくなくて面白く」する爲めには、何より龍南諸君の自覺が必要だまゝ見給へ、龍南の大多數の人は雜誌に對して餘りに冷淡ぢやないか。原稿募集の揭示を出しても、寄稿する人は或る特定の者を除いては、殆んど無いぢやないか。それでゐて、「龍南會雜誌はある一部人士の獨占物だ」とお廉達ひの憤概をしてみたり「雜誌部委員は専横だ」と不平を洩したりするんだから、全くお話しにならないよ。

(ある讀者)——君達の勧め方が足りないのぢやないかい。

(ある編輯者)——いや、そんな事は決してないよ

僕達が仰々しく募集の揭示を出すのは形式や物好きでやるのぢやないからね。今度の懸賞文だつて僕は極力勧誘したんだよ。特に、勝手の解らない新入生諸君には懸賞文の性質や内容に就いて詳しい説明までして投稿を勧めたんだ。それにも係らず、集つたのは九篇しかない。九百人中應募者が唯の九名ぢや餘り情けないぢやないか。(尤も「懸賞文」と云ふものを嫌いな人もあるがね)——個人的の勧誘かい?之れは最も効果があると思つたが止むなく遠慮した。と云ふのは、個人的に勧めて若しその人の出した作品が、貧弱なもので、お挨拶にも發表出来ない場合には、委員が板挟みの責めを負はなければならぬからね。實は僕も二三度此の苦境に陥つたんだ。その爲め、僕はある投稿者から怨まれたよ。

(ある讀者)——板挟みだなんと云つて、案外それを利用してンぢやないかい。之れまでの雑誌を見てみると、委員のものが多いぢやないか

(ある編輯者)——それは君の誤解だよ。成る程、

之れまでの雑誌を見ると、委員のものが大部分だ。が、前に云つたやうに原稿が集らないし、それに、たまに集つても、それが發表されない程拙劣なものであつた場合には、(いくら雑誌部委員だつて人間だから)自分のものを發表するだけの「雅量」乃至は「我鬼」はあるからなあ。然して、恐らく、寛大な龍南の諸君は、最も面倒な仕事に没頭を余儀なくされてゐる雑誌部委員に、此の位の獨斷は許してくれるだらう。

(ある讀者)——あ、解つたよ——それは兎に角、問題を前に戻して、龍南會雑誌を、もつと一般的に、もつと垢抜けのしたものにするには、如何したらいいだらう?

(ある編輯者)——さうだね——僕の考へでは、雑誌をもつと文藝的にするんだね。尤も、之れ迄少數の人の努力に依つて、多少は文藝的になつてゐるが、まだ學校機關雑誌と云ふ臭味を全く脱してゐないね。

(ある讀者)——それは少々考へもんだよ。何と云

つても「龍南」は學校の機關雜誌だから、機關雜誌的臭味を帯びてゐる所に存在の意義があるんぢやないか。

(ある編輯者)——さう云へばそれ迄さ。「龍南」を今迄通りに陳腐な學校機關雜誌の域に止めて置くのなら何も論はないよ。だが、それと同時に「龍南會雜誌をもつと一般的にもつと垢抜けのしたものに……」と云ふ君の質問は、てんで問題にならないぢやないか。

(ある讀者)——然うかなあ——併し君、それはそれでいいが、「龍南」を文藝雜誌にするのは理科(二部三部)の人は不満だらうし、それに文科(一部)だつて名稱は「文科」だけれど、先々文學をやらうとする人は、此の龍南には殆んど居ないよ。だから……

(ある編輯人)——だからさ、益々必要ぢやないか先々文學をやる人ばかりなら、何も論はないが、大抵の人は他の路を進むんだから、せめて、専門的な事をやらない高等學校時代に、大いに文藝的の教養を爲す必要があるんだ。

此の意味に於て、將來眞劍に文學をやる人の少い此の龍南から發行する機關雜誌を益々文藝的にして、此の方面の教養を深めるのは全く必要な事だ。(之れは一寸考へると矛盾のやうに思はれるが、少し落ち着いて考へればすぐ解ることだ)それに、將來何れの路を進むにせよ、苟も高等の教育を受けた者が「文藝的明き盲目」では餘りに悲惨だよ。此の悲惨な者が、現今日本の政治家とか實業家とか云ふ連中の中にはごろ／＼してゐるからね。

(ある讀者)——氣焰當るべからずだね。

(ある編輯者)——奇縁ぢやないよ。當然の言だよまあ聽き給へ、時代が進んだお蔭か、今の青年の中には、文藝を危險視したり無視したりするやうな困つた人間は居ない筈だから、今更僕が「文藝の効能書」を讀み上げる迄もないが、茲で一寸云つて置きたいのは、文藝や演劇に通じたやうな顔をした青年に、案外、眞正の文藝や演劇の解らない者が多い事だ。そこで……

(ある讀者)——あゝ、もう澤山だ。君の云ふことはよく解つたよ。併し君、龍南傳來の全看板たる「剛毅木訥」はどうする。僕はどうか考へて、生やさしい文藝と「剛毅木訥」とは相容れないと思ふよ。

(ある編輯者)——飛んだ所に金看板を擔ぎ出したね。君は「剛毅木訥」を昔のまゝの古臭い解釋法で律しやうとするから、そんな事を云ふのだ。いくら「剛毅木訥」でも、卅年の昔から今日まで、「剛毅木訥」さん、お前は何でも仁に近いさうだよ」と千遍一律の解釋を下されては、いくら暢氣な「剛毅木訥」先生も怒り出してしまふぜ。

(ある讀者)——それぢや、「剛毅木訥藝術」に近しか。

(ある編輯者)——まあ、そんなもんだ。所で、冗談はいい加減にして、——實際、「剛毅木訥」が文藝と相容れないと云ふのは君の偏見だ。君は「文藝」と云へば何でも生やさしいものばかりだと思つてゐるから、こんな誤解をする

のだ。酒臭い、涙ッばい、そして生白い女色で彩られた「遊蕩文學」のみが「文藝」だなどと思つてゐると大間違ひだ。藝術の世界は偉大だ。總てのものを受け容れる——善も惡も、戀愛も争闘も、そして「剛毅木訥」も……

(ある讀者)——まるで、新しい劇の臺辭みたやうなことを云ふね、

(ある編輯者)——柄にもない半疊を入れないで、黙つて聽けよ。實際、「剛毅木訥」を標榜する龍南に、浜拔けのした輕妙な、そして神經質な都會藝術を求めるのは無理な事だ。此の龍南から生るべき藝術は當然、新しい意味の「剛毅木訥」に根ざしたものでなければならぬ。それで、「剛毅木訥」は文藝と相容れないどころか、却つて、龍南文藝の基調となるべきものだ。どうだい君、解つたかい。

(ある讀者)——うん、何だか解つたやうな氣もする。

(ある編輯者)——氣もする位ぢや少し心細いね。だが、兎に角、僕は龍南の諸君が一般にもつ

と自覺して、雜誌「龍南」を舞台にして新しい意味の「剛毅木訥」から出發した文藝運動を起し、そして、之れ迄のやうな「吠へる評論」や「切も拔きの論文」や「安ッはいセンチメタルな小説」や「内容の空虚なコケオドシの戯曲」などの所謂「高等中學」式の乳臭い雜文を、雜誌「龍南」から一掃することを切望する。傾斜した灰色の野と美しい夕焼と、そして、女装の美少年に生命を托した話せる「野男」の歴史を有する此の地から、重厚な感じのする藝術

が欲しいもんだ。

(ある讀者)——何だか難しい理論ばかりならべたがそれが、龍南會雜誌をもつと「面白く」する方法かい。僕にはどうも解らないよ。

(ある編輯者)——之れだけ云つて解らなきあ仕方はないよ。だが、「お互に」どうも困つたものだ！

(ある讀者)——困つたものだ！(完)

雜誌「龍南」でお別れするに際して此の一文を龍南の諸氏に捧げます。

—(大正十年二月)—